

例 言

- 1、本書は平成7年度国庫補助事業－市内遺跡発掘調査事業の報告書です。
- 2、調査の経費は、国－1,800,000円、県－900,000円、の補助による総額3,649,564円でした。
- 3、調査期間、及び、整理期間は平成7年4月3日から平成8年3月31日まででした。
- 4、調査は上福岡市教育委員会が主体し、社会教育課が主管となって実施しました。事務局は、課長 泉 義光、係長 仲 智洋で行い、発掘調査は、学芸員 柳沢健司が担当した。
- 5、報告書執筆は柳沢健司、トレースは、鈴木千恵子、柳沢健司がおこなった。
- 6、調査及び整理に当たっては、下記の皆様から多大なご協力がありました。記して厚く感謝の意を表します。
安藤隆三、宅岐ヒサ子、大野俊夫、小田静夫、佐々木輝生、塩谷利雄、鈴木千恵子、馬場伸一郎、濱邊良一、森田志満、吉野初子、斉藤暈店
- 7、発掘調査及び整理報告に当たって、下記の関係機関並びに皆様からご指導・ご教示を賜りました。記して厚く感謝の意を表します。

浅野晴樹、天ヶ嶋岳、荒井幹雄、新屋雅明、市川修、馬瀬智光、大柴英雄、大塚達朗、岡田隆男、岡田賢治、小川良祐、小俣 悟、柿沼幹夫、加藤秀之、川名広文、小泉功、小暮貞作、小西正捷、笹森健一、佐藤春生、佐藤良博、下村克彦、鈴木敏昭、城近憲市、高崎直成、高橋一夫、田中信、角田史雄、坪田幹男、利根川章彦、中島宏、長岡聡司、中平薫、鍋島直久、早川智明、早坂広人、松本富雄、松本尚也、水村孝行、村上達哉、柳井章宏、柳田敏司、山形洋一、山浦清、横川好富、吉原道夫、和田晋治、県文化財保護課。

I 調査に至る経過

武蔵野台地の縁辺にあたる上福岡市域は、大きく標高16～18mの武蔵野段丘面と標高8～10mの立川段丘面の台地と標高6～7mの沖積地帯にまたがっている。沖積地は古東京湾として、縄文前期の海進時には海辺を形成していたことから、台地の縁辺に所在する縄文時代前期の上福岡貝塚などが著名であるが、それ以降の縄文時代前期の鷺森遺跡、同中期のハケ遺跡や西遺跡、古墳時代初頭の権現山墳墓群、古墳時代前期および後期の集落跡である滝遺跡、また奈良・平安時代の松山遺跡や川崎遺跡、中世以降の長宮遺跡なども知られている。一方、沖積地には自然堤防が形成され、弥生時代末から古墳時代初頭と奈良・平安時代の集落跡などの存在が県埋蔵文化財調査事業団が実施した伊佐島遺跡の発掘調査によって判明した。下福岡城山遺跡では、かわらけとも呼ばれるロクロ土師器、古瀬戸系施釉陶器や常滑窯産陶器が建物跡や井戸跡に伴って出土した。

このように、当市域には古来からの遺跡が数多く眠っているが、当市は首都圏30kmに当たり、昭和30年代より大規模な開発が行なわれ、遺跡の変更を余儀なくされてきた。近年では、大規模な開発は影を潜めたが、個人住宅の建設などの小規模開発が多い現状にあり、遺跡はいわゆる蚕食状態となって、現状変更が進行している。そこで、当市では、文化財保存事業費の国庫補助金を受けて、個人住宅等の小規模開発に対し、記録保存の発掘調査を16年間に亘って実施し、その成果を「埋蔵文化財の調査」と題して(1)～(17)まで刊行してきた。今年度は、下記の6遺跡15地点が調査の対象となった。

これらの発掘調査は、市庁内関係各課と連絡調整をとり、農地転用や開発申請を受けて、遺跡に影響を及ぼすものに対して、工事主体者と事前協議の結果、県文化財保護課の指導を受けて実施したものである。また、遺跡の有無が判明していない地点についても同様に、工事主体者と協議し、遺跡の有無を確認することを第1の目的として、県文化財保護課の指導を受けて、試掘調査として実施したものである。

なお、下記の9については、試掘調査のみを国庫補助事業の対象として実施し、遺構が確認された場合には、工事主体者と遺跡の取り扱いについて再度協議を行なうことを予定していたものである。また、今年度の事業では、平成6年度の事業として実施したハケ遺跡の一部、城山遺跡第1次調査の一部、今年度実施の長宮遺跡第20次調査の一部について整理作業を実施した。整理の内容は、水洗、注記、接合、図面整理等である。

(遺跡名・調査の種類)	(所在地)	(調査面積)	(原因)	(調査期間)
1 城山遺跡 試掘調査	福岡字天神廻148	350 m ²	個人住宅建設	4/3～4/14
2 長宮遺跡 第20次発掘調査	長宮2-1-22の一部	169.59m ²	個人住宅建設	4/10～5/9
3 松山遺跡 試掘調査(1)	築地3-1-9,10	303 m ²	宅地造成	5/10～5/19
4 松山遺跡 試掘調査(2)	築地3-3-2	542 m ²	宅地造成	5/22～6/15
5 長宮遺跡 第21次発掘調査	長宮2-1-63,-65	360.94m ²	個人住宅建設	6/19～8/8
6 長宮遺跡 試掘調査(1)	長宮2-1-20外	421 m ²	市道敷設	8/9～8/28

7	長宮遺跡	試掘調査(2)	上ノ原3-1-6外4筆	1528 m ²	共同住宅建設	10/4～10/12
8	川崎遺跡	試掘調査(1)	川崎 2-7-2, -3	1126.34m ²	消防署建設	10/13～10/16
9	松山遺跡	試掘調査(3)	築地 3-2-23	153.25m ²	個人住宅建設	10/17～10/20
10	長宮遺跡	試掘調査(3)	長宮 2-1-60	269 m ²	駐車場敷設	10/23～10/25
11	駒林遺跡	試掘調査	駒林字新田前271-2	231 m ²	個人住宅建設	11/8～11/24
12	滝遺跡	試掘調査	滝 1-3-13	462.00m ²	共同住宅建設	11/27～11/30
13	川崎遺跡	試掘調査(2)	川崎字宮脇150-2	680 m ²	資材置場敷設	12/4～12/8
14	長宮遺跡	試掘調査(4)	長宮 1-3-13	120 m ²	駐車場敷設	12/12～12/25
15	松山遺跡	試掘調査(4)	松山 2-5-8, -16	413.00m ²	宅地造成	12/22



第1図 遺跡位置図(1/20000)

第7図 松山遺跡試掘調査区(4)全測図(1/500)



●試掘調査(3)

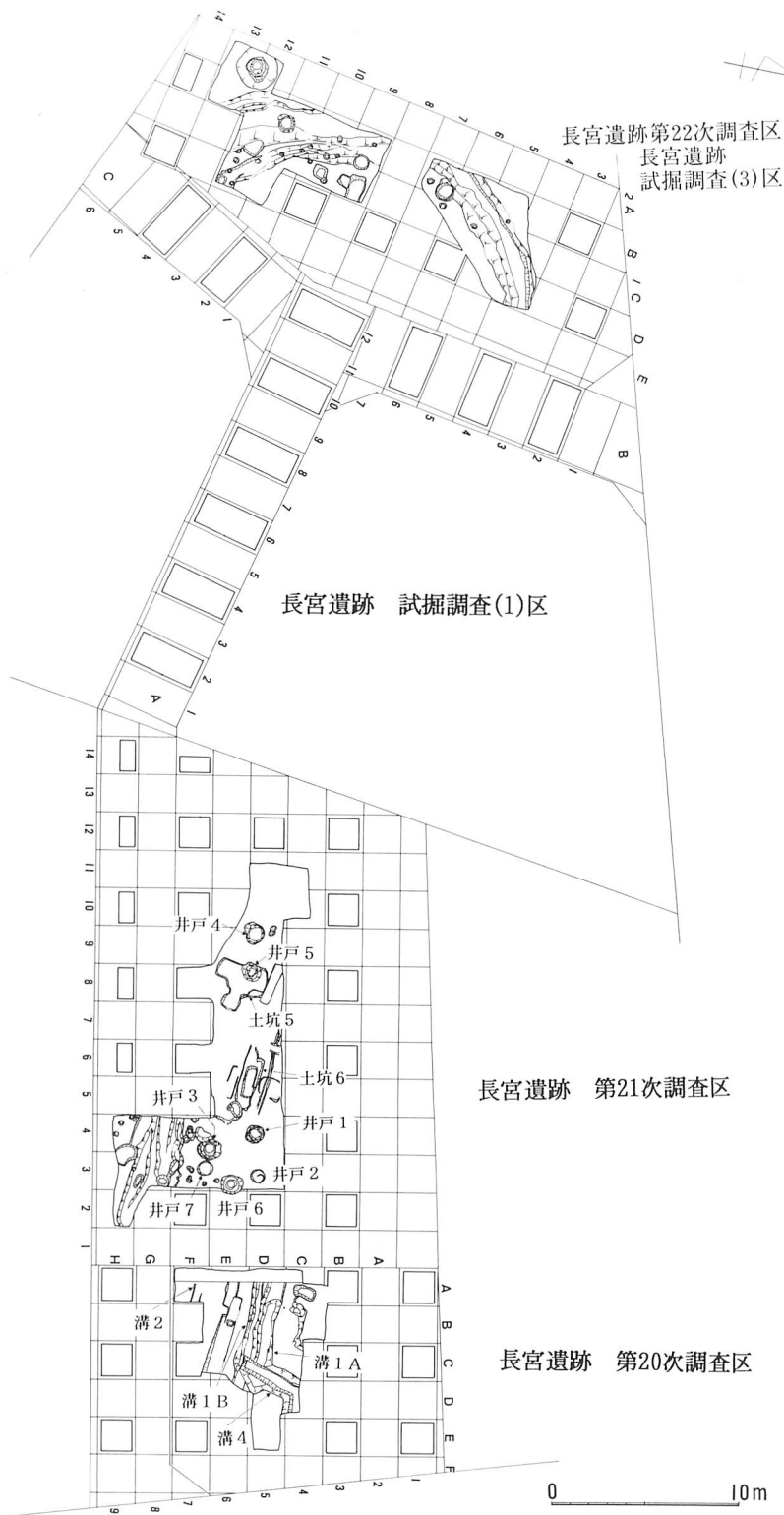
試掘調査(3)区は、試掘調査 区の南東20m、第13次調査区の、南西40m に位置する。9月に築地地区の地区計画道路敷設に伴い発掘調査がおこなわれ、本調査区の南隣に、第17号住居跡が確認された。図面整理をおこなっていないので今回は図示できないが、これは、第11、第15、試掘調査(2)区で所在のみが確認された第16号の3軒の住居跡と近い時期と考えられる。長宮遺跡の第4次調査と第19次調査で確認された2軒の住居跡(それぞれ第1号住居と第4号住居と命名)もこれらと同じ時期と推察されるが、後者の整理が終了していないため遺物による詳細な比較検討が必要となっている。調査は、10月17日、西側の道路との境界線を基準に南西隅の境界杭から図示したように北へ向かってA～G区、西から東へ1～9区を設定し、第2区列から1区おきに人力にて表土除去作業をおこなった。標準土層は、表土が30cmつづいて10cmのロームブロックを含む暗褐色土層があり地山であるハードロームに至る。ロームブロックを含む層は、耕作による攪乱でできた層であろうと推察される。第8区列に至ってついに遺構・遺物を確認できなかった。平面図作成後、埋め戻しをおこない、器材を撤収したのは、10月20日である。

●試掘調査(4) 本調査区は、平成6(1994)年1月に上福岡市遺跡調査会が調査を実施した第19次調査区の西側隣接地にあたる。図面上で北端の境界杭を基準に1～20区、東からA～I区を設定した。12月22日、現地にてB区列に第1トレンチを設定、図示したように3mおきに第2トレンチ、第3トレンチを設定した。重機にて、トレンチ部分の表土を除去し、人力にてローム面の精査につとめた。しかし、10cm幅のトレンチャーによるごぼうの作付け痕が格子状に走っているのみで、遺構・遺物は一向に確認できなかった。そのため当日中に調査を打ち切って、器材を撤収した。



IV 長宮遺跡の調査

長宮遺跡はこれまで19次にわたる調査と試掘調査を12回行ってきた。その結果、中世末～近世初頭の集落跡が確認され(第1、第2、第7、第8次調査)、縄文時代前期(関山期)の住居跡計2軒(第5、第18次調査)、古墳時代末期の住居跡計2軒(第5、第19次調査)を確認している。しかしなが松山遺跡試掘調査(4)作業風景(南より)



第 8 図 長宮遺跡試掘調査(1)、(3)、第20、21次調査区全測図(1/400)

いる場合がある。第 5 区列の遺構確認面がハードロームではなく黒褐色に変化し陶器片などの遺物の出土がみられたので、第 9 区列まで表土除去作業およびジョレンによる遺構のプラン確認のための精査終了後、第 5～第 7 区にむかって拡張作業を行なうことにした。当初、A-5～7 区、C-

ら地表面に遺物の散布が希薄なことや縄文時代前期(関山期)の住居跡にしても古墳時代末期の住居跡にしても散発的なため遺跡の範囲を確定できていない。今回の調査区は、昭和52年に市立滝保育園建設に先立って実施された第 1 次調査区の北側隣接地である。長宮・築地地区計画が平成 5 年12月27日に決定されたため、当該調査区域に地区計画道路を敷設することとなり、その脇に個人住宅が 3 棟建設されることとなった。そのうち第 20次調査区で 1 棟分、第21次調査区が 2 棟分の敷地に当たっている。

●第20次調査

4 月10日、調査区の北側土地境界線を基準に、西側より A～G 区、北側より 1～10 区の 2 m グリッドを設定した。図示したように第 1 区列より 1 区おきに人力にて表土除去、ローム面精査を実施した。調査区の標準土層は、15cm くらいの暗褐色土、ローム粒子 2 mm 大を含む暗褐色土が 25cm 前後、その下にローム粒子のほかに 1 cm から大きいものは 5 cm に達するロームブロックを含む暗褐色土層が厚さ約 30cm 程度である。ロームブロックを含む層が遺物を多く含んで

況及び中世陶器の流通史を考える上で良好な資料と考えられるものを一部紹介したい。

1. 板碑片。緑泥片岩製。枠線が長さ14cm分残存する塔身部の破片。枠線内部に刻まれているものは、脇待種字の蓮台の一部であろう。溝1Aの底面北側に張りつくように出土した。

2. 常滑産陶器。色調と質感はいわゆる土管の胎土に似るが、より焼締まり、きめ細かい。片口鉢Ⅱ類の生産地編年10期(1450～1500)のものである。体部が直線的に開き、口縁平坦面は内面、外面に共に張り出しがみられ、断面はT字状を呈する。体部外面は親指によると思われる指頭整形痕がのこる。体部内面は、摩滅し非常にならになっている。破片は2点が接合し、溝1Aの北側と溝1Bの覆土中より1片ずつ出土している。

3. 在地産軟質土器。灰白色。体部は若干外反気味であるが口唇部がやや内湾する。体部外面に指頭整形痕、内面外面ともに斜めのナデがみられる。口縁部では、内面にて口縁端部のわずかに内湾した突起より2.5cm、外面は口縁の先端より2cmの横位のナデが施される。14世紀後半～15世紀の所産であろう。溝1Bの覆土中より出土。

4. 瀬戸・美濃産陶器の擂鉢の口縁部破片。釉の色調は暗い紫である。口縁端部がやや内湾することから大窯Ⅱb期(1550～70)のものである。縁帯は、口縁の先端より1.7cm、擂り目は、3cm幅に13本と推察される。溝1Aの覆土中より出土。

5. 瀬戸・美濃産陶器の擂鉢の口縁部破片。釉の色調は赤みがかった紫色でにぶい光沢をもつ。縁帯は、口縁外面にて1.4cmであろう。擂り目は、先端部が3本みられる。溝1Aの覆土中より出土。

6. 瀬戸・美濃産陶器の擂鉢の底部破片。胎土は焼成の加減でやや赤味をおび、胡麻粒大の黒色粒子をまだら状に含む。底部内面に同心円状に擂り目がみられる。体部内面の擂り目は、4.5cm幅に16本である。釉の色調は茶色でややどぎつい光沢をもつ。18世紀初頭の所産であろう。

●第21次調査 第21次調査区は、第20次調査区の西側隣接地である。6月19日、図示したように2mグリッドを設定し、北よりA～I区、東より1～15区を設定して、第2区列より1区列おきに、



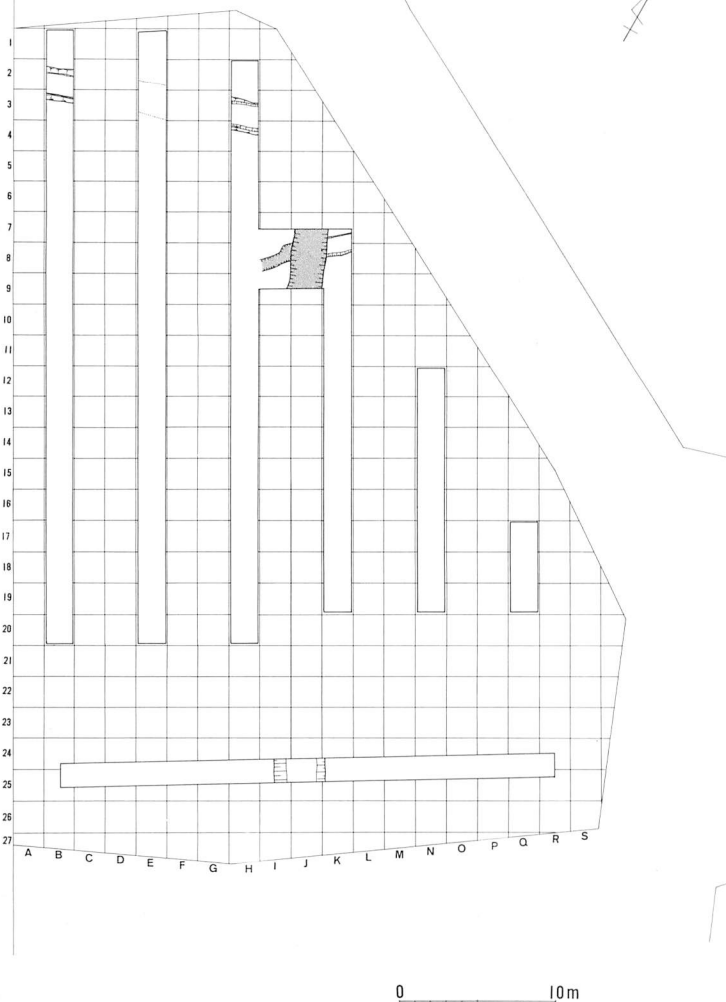
長宮遺跡第20調査溝1遺物出土状態(北より)



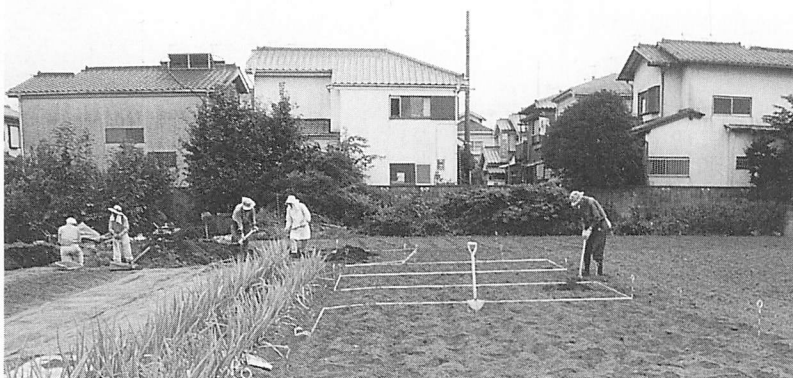
長宮遺跡第20調査遺構完掘状態(西より)



長宮遺跡第21次調査拡張風景(東より)



第10図 長宮遺跡試掘調査区(2)全測図(1/500)



長宮遺跡試掘調査(1)作業風景(北より)

って出土したものの、当時構築されたものではなく、近世以降の人々が土器を埋めるためにつくった土坑であろう。井戸6号と井戸7号の覆土上層は、ロームブロックであったが、この2つの遺構を廃棄する際、隣接する井戸1～3号を構築するためにくりぬいたロームを捨てたとすれば、井戸1～3号より、井戸6号および7号は古いと考えられる。長方形の土坑や溝跡に関しては、ごぼうの作付け痕と平行に構築されていることから、ほぼ近接する時期のものと考えることができる。土

人力にて表土除去作業を開始した。G～I区列は、実際のところ長宮地区の地区計画道路敷設部分にあたるが、施工業者の個人住宅を早期に着工したいという希望と市の道路主管課との関係から調査をはやめに行なう分には支障がないことが確認できたので、同時に調査を行なうことになった。調査を開始してまもなくF区列、D区列より陶磁器破片を主として少量の須恵器、土師器、縄文土器片などの遺物の出土が認められた。また遺構の覆土である暗褐色土、黒褐色土を確認したため、第14区列までの表土除去及び遺構確認のための精査をひととおりおえると、E区列の表土除去を中心とした拡張作業を実施した。確認できた遺構は、井戸1基(井戸6号)および便宜的に井戸と命名した円柱状の土坑6基、溝4条(うち2条は重複している)、土坑14基である。土坑は、楕円形のピット状のもの、長方形のもの、不定形のものを含めた総数であり、重複しているものもある。井戸5号と土坑5号が切りあっているが、井戸5号の構築されたあとに土坑5号が構築されたことが確認できた。そのため土坑5号の覆土中から縄文中期の土器破片がまとま

坑6号からは、染付磁器破片が出土し、近世以降であることはあきらかである。遺物の年代・産地等については本報告をまちたい。調査は8月8日に終了した。

●試掘調査(1) 長宮・築地地区計画が平成5年12月27日に決定されたため、土地所有者から寄付採納を受けた順から地区計画道路を整備することになっている。開発行為等を指導する関係課同士で協議をもち、とりあえず遺構・遺物確認のための試掘調査を実施したものである。

8月9日、図示したように第21次調査区F区列G区列境界線から西へ45cmの杭および道路工事予定区域の北側の境界線を基準にA-1~12区として2m×4mのサブトレンチ列を設定した。また道路のY字型の北側へ伸びる「枝」の部分を西側境界線を基準に北からB-1~7区とし、南へ伸びる「枝」を南西端の杭とA-10区の北側に位置する杭を基準にC-1~6区を設定した。

1区ごとに人力にて表土を除去し、遺構確認面の精査につとめた。しかし、A区列、C区列ともに遺構確認面に達するはずの40cmまで表土を除去しても、耕作によると考えられる攪乱ロームブロック層かあるいは、遺構の存在しないハードローム層であって、遺構を一向に確認することができなかった。遺物は縄文土器の細片が少量出土した程度である。B区列においては、B-6区にて天目茶碗の体部の破片が出土した。遺物が集中的に出土したのは、B-2区で、縄文土器の細片、打製石斧の先端破片1点、陶器片である。天目茶碗も体部から底部の破片が出土し、黒い鉄釉は光沢をもち、底部は削り出し高台である。深いところで地表から1.5mをこえる場所があったのは、後述する試掘調査(3)で確認された溝の延長であると考えられる。平面図を作成し、人力にて埋め戻しをおこなった。調査が終了したのは8月28日である。

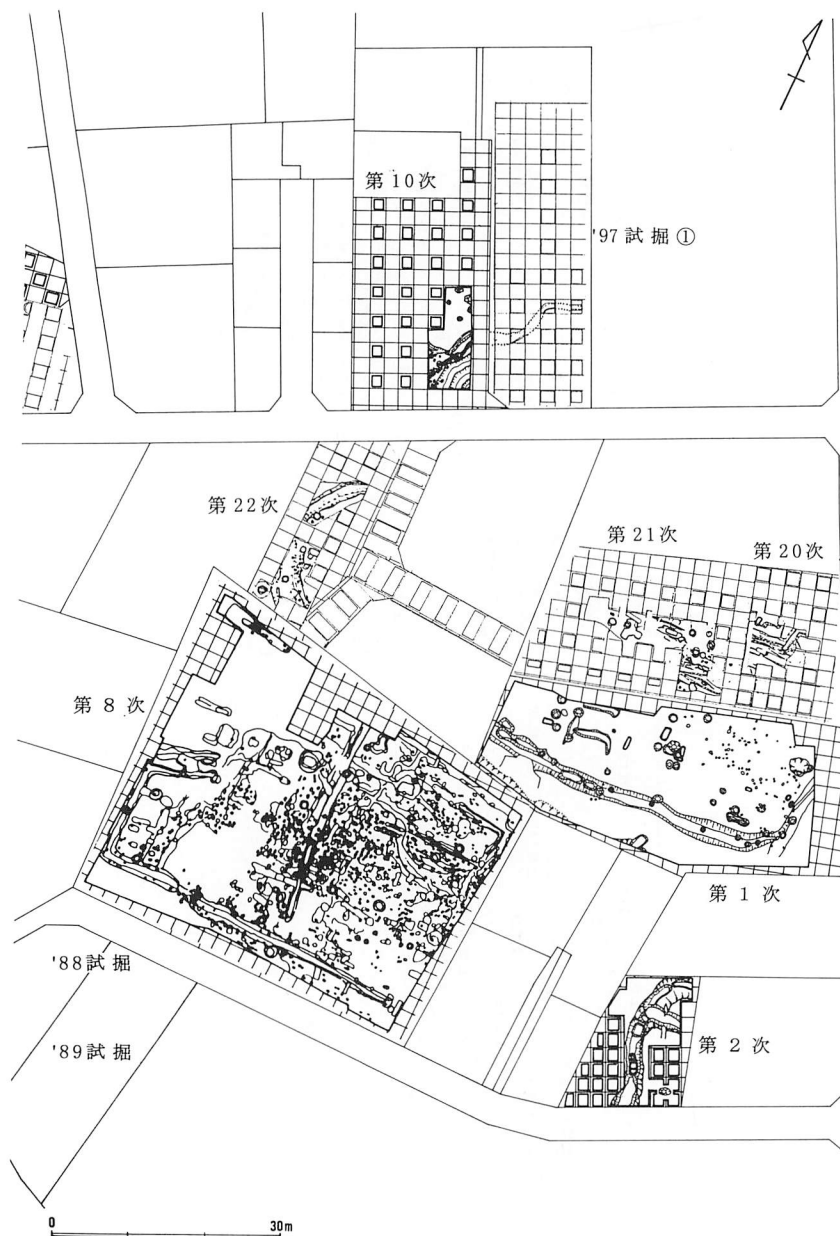
●試掘調査(2)

当調査区は、長宮氷川神社の入り口の左脇の部分である。参道及び参道に伴う遺構、とくに「千軒町」との言い伝えのある中世の遺構が存在する可能性も考えられた。10月4日、図面上で調査区の西側境界線を基準に北から1~27区、西からA~S区を設定した。現地では、図示したようにB区列より幅2mのトレンチ（以下「T」とする。）

を2mおきに設定して重機にて表土を除去し、ローム面まで掘り下げ、人力にて遺構の有無を確認するために精査を行なった。ローム面までは約40cmであった。B区列から東へむかって第1~第6T、第21区列に高さ1m程度のブロック塀が存在したので第7Tは幅1.5mとして、西端は、西側境界線から5m、東端は、南側境界線から3.5m、西側境界線から35mの位置に設定した。第1Tと第3Tの北端部分で幅2mの函葉研形の溝が東西方向に走っている。深さは確認面より1.1mくらいであった。第4Tの北端部分でも溝らしきものがみられたので拡張を行なった。幅2m強の溝が南北方向に流路をとっていた。第7Tの中央部分でも、幅約3mの溝が確認されたが流路の延長と一致するので第4Tの溝と同じものと考えてさしつかえないであろう。断面は函葉研形で、第7Tでは、底面が幅2mである。あるいは、第1Tと第3Tの北端部分を東西方向に走る溝が第3Tと第4Tの間で流路を変えているのかもしれない。これについては今後の試掘調査等の成果をまちたい。第6Tでは地表面から40cmの場所で中期を中心とし



長宮遺跡試掘調査(2)作業風景(南より)



第7-12図 長宮遺跡（中近世）中心部調査地点全体図〈1/1000〉

出土遺物（第7-32図）は、1は丹波系播鉢（第11次溝）、2は瀬戸美濃産天目茶碗、3は焙烙（共に資料館調査区溝出土）、4は刻字石製品（第13次溝）であり、近世前半から後半に属する（文献39・本書）。

長宮遺跡第20次調査（第7-34図）

遺構は溝4条、長方形土坑群である。溝1Aは、溝4の上に構築し、幅は120cmである。溝1Bは溝1Aの南側を破壊しており、幅は60cmである。また、覆土中に鉄分を含む層や粘性の強い黒褐色土層が存在し、水が流れていた可能性がある。出土遺物から中世後半と考えられる。溝4は北東—南西方向に走る（文献61）。

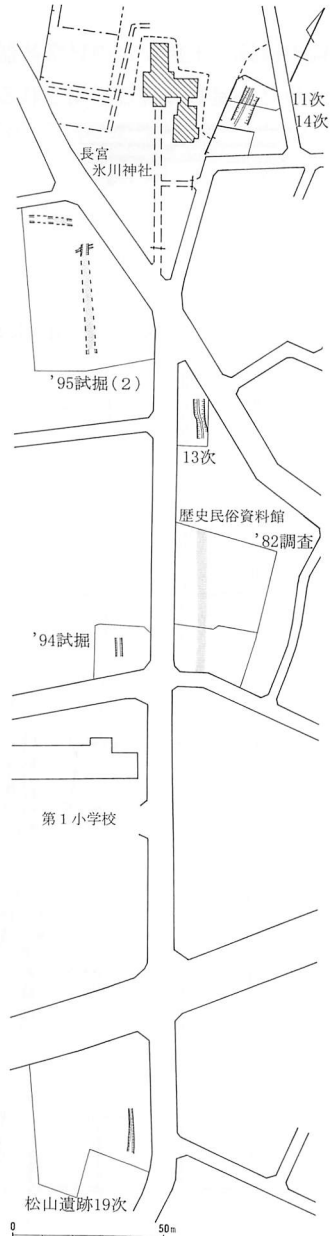
長宮遺跡第21次調査（第7-34図）

遺構は井戸（井戸6号）及び井戸状の円柱状土坑（井戸1～5・7号）、土坑14基、溝4条がみつまっている。土坑6からは近世染付が出土しているようである（文献61）。

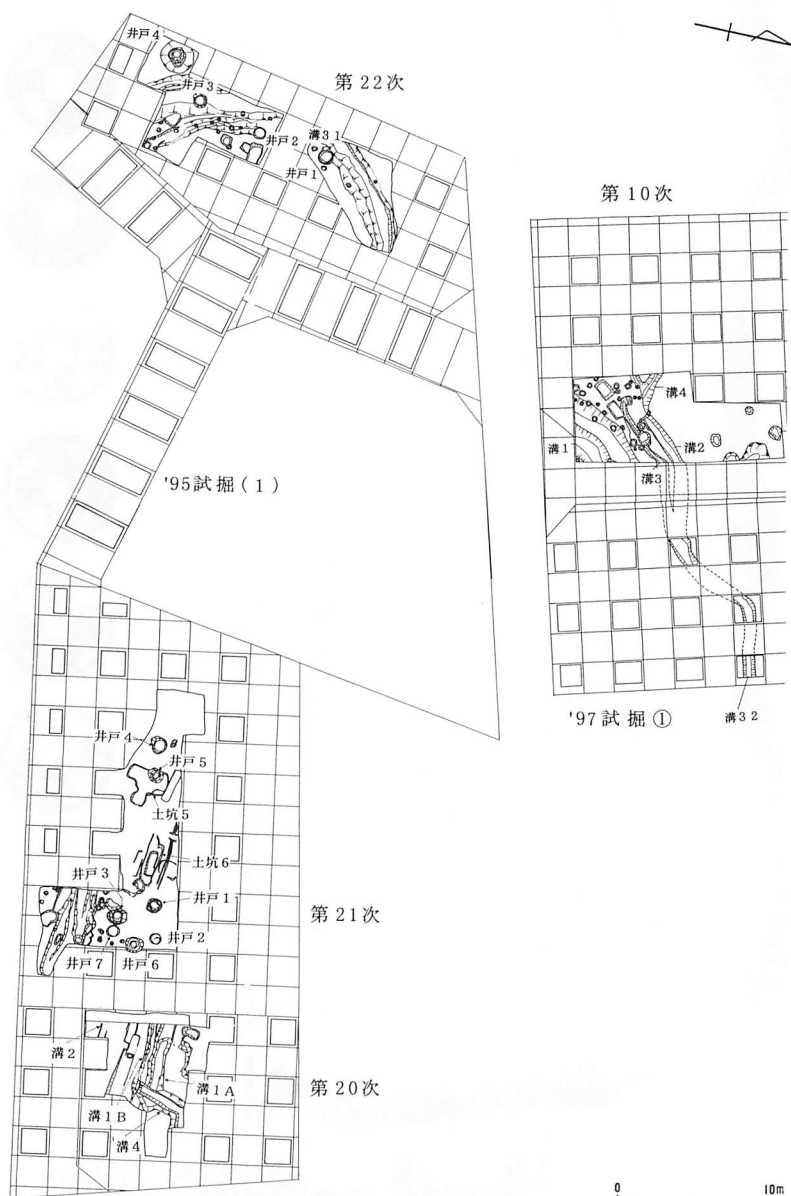
長宮遺跡第22次調査（第7-34図）

遺構は溝1条、井戸4基、土坑3基が確認されている。溝31は北東方向に延び第10次調査区の溝1につながると思われる。中世後半の播鉢が出土している。井戸4は上径2mの播鉢状の井戸である（文献66）。

長宮遺跡は、中近世遺構の分布が長宮氷川神社周辺東側一帯と東方の第7次調査区周辺の東群に分れる。さらに前者は区画的な溝によっていくつかの小群に分れ、井戸跡や墓坑、板碑廃棄の土坑がみられる。遺物では天目茶



第7-31図 長宮遺跡参道脇溝の配置図（第11・13・14次等）〈1/2500〉



第7-34図 長宮遺跡第10次・20~22次他遺構配置図〈1/500〉